

令和2年度 第2回 介護福祉学科 教育課程編成委員会 報告書

日時：令和3年3月1日（月）15：00～16：30

場 所：zoom形式

参加者名

委員 大久保 佳世（社会福祉法人はるび 特別養護老人ホーム はるびの郷 施設長）
委員 佐々木 幸 （日本介護福祉学会・日本社会福祉学会）
教員 石川 秀志（介護福祉学科 統括学科長）
教員 細野 真代（介護福祉学科 学科長）
職員 萬崎 保志（教務課 次長）
職員 星 朋美（教務課 課長代理）
職員 丸山 航也（教務課）
職員 松木 健太（教務課）

議 題

1. 第1回振り返り

萬崎より、第1回の振り返りと、今年度の代替授業について説明があった。

【今年度の代替授業、また来年度の代替授業について】

- ・ 今年度は、事前に東京都福祉保健局に事前相談を行って代替実習を実施。
- ・ 次年度については、代替実習を容認する国の通知の効力は継続するようだが、社会状況によって通知が変更され代替方式が認められなくなった場合は、速やかに通常の実習形式に戻す。状況によって実習の形式を考えていく。

【第1回 振り返り】

前回、意見交換を行ったテーマは下記の2点。

- ・ 留学生の学力アップ
- ・ オンライン授業や学内実習を学生にとってより充実した内容にするために出来ること

2. 検討事項

<現場が求めている介護福祉士とは>

検討に先立ち、統括学科長の石川より外部委員に対し、「介護福祉学科には職業訓練生・留学生・高卒生など、幅広い年代・国籍の学生が入学しているが、実際の現場ではどのような介護人材を求めているのか」との質問があった

大久保)

勤務施設で一番重視しているのは、資格よりも人間性。また、本人に頑張りたいという気持ちがあれば育てる方針のため、年齢や国籍はあまり気にしない。

石川)

資格を作っている中身は“知識”と“技術”であり、通常の授業を通してこの知識と技術を取得するカリキュラムを提供している。しかし、その知識や技術を自分のものにしていくためには、大久保委員の仰っていただいた本人の人間性が重要だと感じる。今以上に人間性の教育体制の構築にも力を入れる必要性を実感する。

<人間性の教育に関する学校での取り組みについて>

複数の属性を持つ学生達に対し、現状の学科としてどのような指導体制をとっているか。

細野)

入学後すぐにマナー講座を実施し、挨拶や現場対応、言葉遣いなどを属性に関わらず教授。また生活支援、介護総合演習などの授業でも挨拶や身だしなみ、態度、言葉遣いなどを授業で取り入れているが、それだけで人間性が育っているかどうかは何ともいえない。その他、職業倫理について学ぶ授業は実施している。

萬崎)

学生がマナー講座などを一つの科目として捉えるのではなく、何のためにやっているのかが大前提として必要であると感じる。また、そこで学んだ内容が日常的に反映されて初めて生きてくる。

星)

窓口で友達感覚の言葉遣いの学生や、申請書などを鉛筆で書いてくる学生などもある。その都度注意はするが、事務局全体で取り組むべき課題。

石川)

生徒は教職員を良く見ているので、私たち自身がきちんとできていれば、学生も見て学んでいくのかなとも思う。そのため、現場で求められている介護福祉士像を熱心に伝える、そして介護福祉士としてお手本となるような姿を見せていくことも重要。

<現場で求められる介護福祉士像とは>

介護福祉士の在り方として求められる像について、時代と共に変化はあるか。

佐々木)

現場における介護人材と役割は、外国人労働者や職業訓練経由したルートなどが時代と共に増えてくると共に、大きく変化しつつある。しかし実際の現場では介護福祉士としての職能が確立されているとは言い難い。

求められる像の明確化同様、それに近づくための課題などを介護現場との間で実習懇談会などを通じて今まで以上に腹を割って協議する必要があるのではないか。

それによって、養成する側、介護人材を受け入れる側双方にメリットが生まれると思われる。

<留学生について>

前回、留学生向けの教授法の一形態として、留学生にとってのメリットや彼らが自国の社会・文化に照らして納得できるような教授法の導入について話題が及んだ。現在のディプロマポリシーは留学生もふまえた内容になっているか？

細野)

介護福祉士として現場に出すためのディプロマポリシーとなっているため、すべての属性共通。ただ留学生は日本語力の問題もあり、資格を取得することで精一杯になっている現状がある。

大久保)

留学生に関しては、意識を高く持ってもらうしかない。語学力の問題に関しては、実習の際に休憩時間は母国語で会話してしまうなどの日常面からも、学力向上の妨げになっている可能性もある。

<モチベーション（留学生・非留学生）について>

留学生の学習に向かう姿勢を後押しするための検討について意見交換を行う中で、クラスという集団内で学習意欲の低い学生の指導に手をとられているうちに、全体の意欲が低下してしまうケースが報告された。キーとなる要素として、今現場で働いている職員は何をよりどころに仕事をしているのか、それを学生に伝える方策はないか意見交換を行った。

佐々木)

今、教育の現場でも施設の中でも、教わったことに刺激を受け、より引き出せる要素を多く持つ学生や職員が居るにも関わらず、それに丁寧に答えられていない状況がもしかしたらない。このような状況が続くと結果的に全体のモチベーションが下がってしまう。

石川)

高齢者が好きだという気持ちが根底にあることが重要。

佐々木)

好きだというモチベーションを持ちながらも、就職すると“学校で習ったことは役に立たない”と思ったり、実習に行くと“教わっていたことと違う”というような負のモチベーションも多数存在する。現場と学校とのギャップをどうにかしなければいけない。介護のモチベーションゼロで入学する人はいないので、プラスモチベーションは大事にマイナスモチベーションを引き出し、対話していくことが必要。

大久保)

人が好きかどうかは非常に大事だと思う。また、介護のすばらしさを教えきれていないところがたくさんある。例えば、看取り介護。その方の人生の最後に携わせていただけることは本当に意義のあること。もちろん、日々のケアは根底にあるが、目先の苦労ばかりに目を向けるのではなく、その先に待っているこの仕事の素晴らしさを伝えていくことが必要と感じる。

萬崎)

これまでゲストスピーカーとして現場の方や卒業生に来てもらうことはあったが、場合によっては利用者様と zoom でつなぎお話しいただくなど、介護の素晴らしさをもう1回学校としてきちんと伝えていくような場を作れるのではないか。それによって学生も高齢者が好きだという気持ちを再確認することができ、またその気持ちを底上げできるのではないかと思う。

実際に現行のカリキュラムの中で、こういった形を組み込むことは可能か。

細野)

介護の伝え方を工夫していくことが必要だと感じた。現場の声をもっと届けていき、モチベーションを高められるような授業方法も取り入れていきたい。

萬崎)

介護の素晴らしさは人それぞれだと思うので、それぞれが感じる素晴らしさが伝えられると良いと感じる。また、辛いこともあるがこれがあったから乗り切れたなど、生身の部分を学生に伝えることは出来ないか？

佐々木)

介護を辞めた後に素晴らしさを感じる方が多い。マイナスをプラスに変えていくという経験を積み重ねて自分なりの素晴らしさを感じられると思う。モチベーションゼロの

人はいないはずなので、その時の感情を引き出すこともしなければならぬと感じた。きちんと対話をしながら引き出しつつ、伝えつつを繰り返していくことが必要。

石川)

できる範囲で楽しさを伝えていきたいとは思いますが、現場の方に来ていただき声を発信してもらう機会はすでに計画中。楽しさ喜びを感じられる授業を少しずつ作っていけると思う。

今年度のまとめ

- ① 「留学生の学力アップの方法」「オンライン授業の更なる活用方法」などがテーマとして話し合われた。
- ② その過程で、現場で求められている能力は、必ずしも机上の高度な知識や技術というよりは、対人援助職として人間性が重視されていることが判った
- ③ 留学生の学習モチベーション維持の取り組みを検討する過程で、その課題は他の属性にも共通する話題であり、実習とは別に現場職員の「生の声」をもっと日々の授業の中に活用していく案が生まれた
- ④ 具体的には、介護に携わることでの喜び・迷い・悩みまで含めた、いち介護職員の「在り様」を学生に提示することで、困難さは日々あるがそれを上回る喜びのある職業・職場であることを学生に感じてもらうことを目的とする。
- ⑤ ④については、現在学科で企画中でもあり、次年度に委員からの意見も反映させながら、より形式を煮詰めていく。
- ⑥ 同時に、留学生の学習モチベーションのスイッチがどこにあるのか、引き続き検討を行う。

3. おわりに

- ・令和3年度も6～7月頃に令和3年度1回目の会議を予定。またその半年後を目安に2回目の会議を実施する。
- ・事前に資料などで取り組みをまとめたら、共有させていただく。